

学生たちの歴史認識を読む

——DVD「戦争案内」(企画・製作 映像文化協会 2006年)と
明治政府の富国強兵政策——

池 野 重 男

I. は じ め に

以前に私は、茂木誠『経済は世界史から学べ!』(ダイヤモンド社 2013年)を書評した(本誌第65巻第1号 2014年5月)が、そこでは主として同書があまりに通俗的な常識に囚われているがゆえに人びとが安心して(=いまの暮らしなどの自己批判なしに)読めるからこそ爆発的な売れ行きであることを示した。そして、いまという右旋回の時代¹⁾のせいもあって、私はずっと私の目の前にいる学生たちの歴史認識が気になっていた。

それゆえに、日本の資本主義の「発達」というものがいかにアジアを犠牲にして行なわれてきたか、そして、それが現代まで続いていることを映像資料で説く、DVD「戦争案内」(企画・製作 映像文化協会 2006年)を学生たちに見てもらい——DVDが70分という時間だったので90分講義には都合がよかったという技術的な面も理由のひとつ——、そのあとに、それとは対照的な先の茂木氏の考え方・歴史解釈を紹介して、これら対立する二つの考え方を自分でどう考えるかという問題意識でDVD「戦争案内」の感想を書いてもらうことにした。それらが、本稿第Ⅳ節として示すことになる、学生たちのレポートである。これを機会にあらためて、少しでも学生たちが歴史認識の必要性を考えてくれればと思い、そのすべてをここに示し、同時にそのことを通じて歴史認識のありようをも考えてみたい。

こうした作業は、いまという右旋回の時代への私の危惧の表明であり、現場で私ができることの実践であり、さらにとりわけ安倍政権の誕生にまつわる社会事象について「興味・

1) すでに一八年前に、「近年、日本では保守党タカ派やこれに迎合する文化人が、太平洋戦争は侵略戦争ではなくて、『自衛戦争であった』とか、『アジアの植民地解放戦争であった』といった誤った言説を振りまき、騙される人が少なからず増えている」ことを憂え、「日清戦争とは近代日本にとっていかなる戦争だったのか……追及を試みた」のは、「日清戦争を知らずして、今日の日本について正確な理解と認識が得られない、と考えたからにほかならない」と言う、白井久也『明治国家と日清戦争』(社会評論社 97年「はじめに」)によれば、自民党『歴史・検討委員会』が[一九九五年]八月十五日に発行した『大東亜戦争の終結』の中では、『満州は中国のものではない』『日本はやむを得ず自衛のために東南アジアの資源地帯へ出ていった』『日本は(アジア)の被圧迫民族解放のための大きな力であった』『南京事件はモンターージュ(合成写真)でいくらでも(作り話)できる』など驚くべき意見が収録されている。」(p. 25)

関心の問題と社会のありよう」, および「書評: 編集室ふたりから&ひとり九条の会(編集・発行 金住典子/編集協力 原田奈翁雄)『ひとりから——対等なまなざしの世界をめざして』——第55号(2014年6月)」(ともに本誌第65巻第4号 2014年11月)で言及した際に紹介した私たち団塊世代批判へのひとつの応答でもある。

そして、それは、川本三郎氏が、「いまの日本は、信じられないくらいに急速に右旋回しています」という危機意識から、「いま、若い人はこんな時代をどう思っているのか、かつての『若者』としてはそれがとても気になります。」(野坂昭如「昭和ヒトケタからの詫び状 往復書簡 川本三郎さんから野坂昭如さんへの手紙」『通販生活』カタログハウス 第252号 2014年11月)と展開しているのと重なる作業である——,

かつての「叛乱の時代」の主役だった若者たちに比べると、いまの若者は大人しいといえます。それも無理はありません。管理社会は強まり、子供の頃から抑えられている。不況が長く続き、就職や仕事のことを考えたらいいこともいえない。その不満がいびつなナショナリズムにつながったりする。

先だって、九十歳を超える政治学者の石田雄さんが、『朝日新聞』の読者の声欄に世を憂える投稿をして話題になりました。

石田さんは、若者たちはいいたいことがあってもなかなかいいにくい、老人はもう恐いものはない、だからこれからは老人が、しっかり、いうべきことをいわなければならないといっています²⁾。

傾聴すべき意見です。私もあまり老けこむことなく若い時のように「ノン」というべきときは「ノン」といおうと思っています。 p.126

Ⅱ. 《歴史知らず》と通俗的な歴史認識の併存

じつは、歴史認識の問題という以前に、学生たちの《歴史知らず》そのものがある。私は、担当している保険論や現代経営入門の講義においても経済学の基本を教える必要があっ

2) やはりこうした問題意識から「わんぱく老人隊」を結成して講演や投稿に励まれた、今は亡き、本多立太郎氏を思い出す。三十年前になるが、私のゼミ生たちが新聞で本多氏の活動を知り、連絡をとって本学で講演会を開催し、テープ起こしをして小冊子を作り、学外のイベントに持参して販売するまで、学生たちが頑張った。そのことで、それ以後、私と本多氏との関係が続いた。以下に毎日新聞に本多氏が67歳の時に投稿されたものを紹介しておく——,

おれは闘^{じい}う老人となる。

おれは老人。やがて、もっと老人になる。ただ、人のよいだけの老人にはなりたくない。だれからも好かれ、いつもニコニコと、限りなく優しいだけの、そんな老人にはなりたくない。

いざというとき、また、軍人が国を支配し、軍人に便乗する政治家どもが国を支配し、孫が兵隊にとられるとき、おれはひょう変して、強い老人となる。闘う老人となる。

戦車の前に立ちふさがり寝転がり、キャタピラの下にもぐりこむ。不敵な老人となる。

「おれは老人。やがて、もっと老人になる。でも——」

て、毎年はじめに封建制社会から資本制社会への移行の経緯＝歴史を語るのだが、それにはどうしてもさまざまな歴史的事件・事象を踏まえなければならない。しかし、である。たとえば、1492年、1543年、1600年、1649年、1688年、1776年、1789年、1868年、1894年、1904年、1910年、1914年、1917年、1929年などといった年号を黒板に書いて、それぞれに該当する歴史的事件・事象を学生たちに答えてもらおうとするのだが、そのほとんどを学生たちは知らない。先の年号で言えば、コロンブスのアメリカ大陸「発見」にまで話を持っていく——ここから世界地図を当たり前のように日本を真ん中に書くとコロンブスの航路が分かりにくいこと、そして、「発見」と言うけれどじつはそこにはすでに人びとが住んでいたのもあり、それは「侵略」であること、などの話に及ぶ仕掛けである——ことすら、大変なのが現実なのである。

そして、これは、単に大阪経済大学という経済系の大学の個別特殊な私の場合だけではない。歴史学科で歴史を教えているという教員もまた、同じような学生たちの《歴史知らず》を嘆いている——

勤務する大学の歴史学科一年生向け授業で、「第二次農民戦争」「旅順虐殺事件³⁾」「台湾民主国」についてアンケートを実施すると、予想した通り正解率は低かった。これらの歴史用語は、韓国や中国の日清戦争に関する歴史教育では必須用語であるにもかかわらず

3) 「[一八九四年] 十一月二八日付の『ニューヨーク・ワールド』は旅順の日本軍は陥落の翌日から四日間、非戦闘員、婦女子、幼児など約六万人を殺害し、殺戮を免れた清国人は旅順全市でわずかに三六人に過ぎないと報道した。『ワールド』は『日本は文明の皮膚を被り、野蛮の本体を暴露した』と糾弾した。旅順から日本に立ち寄った『タイムズ』通信員は陸奥外相に日本軍は捕虜を縛ったまま殺害し、平民とくに婦人まで殺したのは事実である、これは各国の特派記者や東洋艦隊の士官、イギリス海軍中将まで目撃していると強調し、『日本政府の善後策如何』と質問した。この報道は全世界に転電され、日本軍国主義の残虐性は世界のすみずみまでつたえられた。／日米改正条約を審査中だったアメリカ上院では、日本に裁判管轄権を与えるのは時期尚早だという意見が臺頭した。一二月一五日、アメリカ公使エドウィン・ダンに陸奥外相を訪問してこの情勢を伝え、『この際日本政府において何とか善後の策をほどこさざれば、これまで得てきたりたる日本の名誉はことごとく消滅すべし』と警告した。早急に善後処置をとり、責任者を処分する必要が生じた。しかし、虐殺事件を調査すれば、責任問題は、山地第一師団長から大山第二司令官にまでおよぶ危険があり、もし、そうなれば、山県大将とあわせて出征軍司令官の双方を更迭することになる。外地で戦闘指揮中の最高司令官の召還は、出征軍の士気沮喪をまねくのみではなく、政府にたいする軍の反撃をうむおそれがあった。また、当時軍司令官に補職可能な現役将官は、大将に山県と大山のほかは……二人、中將に……[七人] のほかは、すでに高齢の……[三人] のみであった。／もし、山県大将につづいて大山大将を召還すれば、後任人事が難行することはあきらかで、その後の戦争指導を阻害するおそれがあった。／陸奥外相から連絡をうけた伊藤首相はこれらの事情を考慮したのであろう、『取糺すことは危険多くして不得策なれば、この儘不問に付し専ら弁護の方便を執るの外なし』と指示した。こうして旅順虐殺事件の責任は不問に付されたが、その結果、日本軍の軍紀にはおおうべからざる汚点が生じ、残虐行為にたいする罪悪感はいしなわれ、そののちこの種の行為を続発させることになった。」(藤村道生『日清戦争——東アジア近代史の転換点』岩波新書 1973年 pp. 132～133)

ずである。自分の授業の不十分さだけでなく、中高の歴史教育にも問題があることを痛感した。大谷正『日清戦争——近代初の対外戦争の実像』（中公新書 2014年）p.259

が、いまはこの問題は措いて話を進める。

学生たちは、それでいて、日本のアジア「進出」は欧米列強の侵略からの自衛としてやむを得なかったのだ、そうでなければ日本は欧米の植民地にされてしまったのだから、といった、茂木氏のような通俗的な歴史認識についてはしっかりと持っているのである。

私は先の書評で通俗的な歴史認識を示したが、加えて、「中国東北部（旧満州）で少女時代を送っていた私の戦前・戦中・戦後」の中で体験したいくつかの疑問を解こうとして張学良に会って、「あの時搾りこまれていた『事実』は、国の権力者によって脚色されていたことが、しかと認識できた」と言う、富永孝子『国と世紀を変えた愛 張学良と宗美齡、六六年目の告白』（KADOKAWA 2014年 p.317）を紹介しておこう。富永氏も、やはり次のように歴史を学ぶことの重要さを語っている——「張学良から学んだのは、『多くの歴史を識ること』である。そこには現代・未来をも学ぶ貴重なヒントがある。その蓄積で『私の歴史観』が作られる。」（p.318 強調傍点とルビは富永氏）、と。そして、具体的に「あの時搾りこまれていた『事実』は、国の権力者によって脚色されていた」という内実を指摘する——

例えば、日本は日清・日露戦役で得た特殊権益を基に、資源の宝庫である中国東北部進出に当たり『張作霖、学良父子の暴虐な統治に苦しむ貧しい農民を救い、五族協和の新天地を』と謳い、日本人は信じた。

ところが張政権下の東北地方は、豊富な大豆を世界に輸出（三井物産が協力）し、『大豆経済』を基に、金融、鉄道、石炭、鉄鋼、兵器、綿花と各産業は驚くほど発展途上にあった。首都奉天はすでに国際商業都市として繁栄していたのである。……

また日本が仕掛けた『満州事変』では、蒋介石密命により張学良が不抵抗を通し、日本関東軍が奉天を無血占領した。その時の戦利品、兵器、航空機等は欧米の最新機種で、質・量とも想定を超えるものだった。もし学良が密命を無視、全力抗戦していたら、日本軍は苦戦したに違いない、という。

加えて広大な農地、森林、操業中の重・軽諸工業や鉄道も日本が掌中にし、満州帝国に資した。日本は現地住民の犠牲の上に、これらをもとに拡張増産、満州を日本最大の補給基地として太平洋戦争に突入し、敗れた。

……日本政府は、『大本営発表』にすべてを託し、言論統制によって、完全に情報が操作されていた。その操作された『事実』が『歴史』となり人々に浸透し、正確な判断力を奪い、国が破滅した昭和の歴史を体験した世代の一員として、私はこの教訓が骨身に滲みている。

pp. 317～318

当時のこうした事実認識のありようなどについては重要なので、さらに次節でも具体例

を示して確認するが、いまここで問題なのは認識の落差である。これは、かつて「満蒙は我が国の生命線」という言い方がそれだけ認知されていることの証なのだろうが、学生たちには、少なくとも、その対抗として「小日本主義」があったことくらいは知っておいてほしい。川村湊・文／辻下浩二・イラスト『満州国』(FOR BEGINNERS シリーズ日本オリジナル版106 現代書館 2011年)から紹介しておこう――

「満蒙は我が国の生命線」といういい方は、軍事的な防衛線という消極的な意味と、地下資源や農業生産物、労働力といった積極的な意味での資源の供給地、そしてその資源を加工し、商品化した生産物の消費市場という意味を持っていた。……

しかし、これは……際限のない軍事衝突の連鎖、すなわち戦争の拡大を意味することは自明だった。日本列島と朝鮮半島との安全保障のために、満州における日本軍の制圧や治安維持が必要だとしたら、今度は、その満州の安全保障のために、シベリアやモンゴルや新疆地区への軍事進出は当然のこととなる。攻撃は最大の防御という誤った「防衛思想」による「満蒙は我が国の生命線」という考え方⁴⁾は、いずれ無限に拡大し、破綻し、挫折するものにほかならなかったのである。……

こうした「満蒙生命線」説に対立するのが、石橋湛山のような「小日本主義」であり、彼は、満蒙で得た日本の権益を放棄し、満州事変の不拡大方針を取るべきであり、軍事的、経済的な勢力圏、あるいは防衛線や国境線を日本列島内にとどめることを主張した。占領、領有といったコストやリスクの多い方策ではなく、満蒙の資源を貿易、輸入という経済的な方策で日本に持ち込むほうが、経済的に見ても有利であり、いたずらに隣国としての中国、ロシアを刺激し、国際的緊張を高め、軍備や兵員の拡大や拡充を迫られることよりも、合理的で採算に合う政策だと主張したのである。 pp.30～32

川村湊氏は、この「近代日本のメイン・ストリームとは真っ向から対立する思考方法」

4) 「日清戦争への道程を正しく理解するためには、なおかつ日清戦争前までの日本政府の対外政策の性格を侵略的なものと見るべきか、それとも非侵略主義として捉えるべきか、をめぐる最近の論争を解消するためにも、従来やや等閑に扱われてきた日本政府の外圧への対応と、東アジア政策との関連に関する検討は、不可欠のことである」と言う、崔碩堯『日清戦争への道程』(吉川弘文館 1997年 p.2)によれば、「日本政府は、朝鮮を日本の勢力圏内におさめなければ、例え『小欧羅巴国』日本を建設できるにしても、将来的には日本の独立を保全することは、なかなか難しいとの判断をもっていた。日本が対外膨張政策に走ることを選択した理由は、このような判断があったからである。」(p.204) また、平井康嗣・インタビュー「歴史とは人間がどういうものか学ぶこと――作家・半藤一利氏に聞く」(『週刊金曜日』2014年10月17日号)で、半藤一利氏がこの点を語っている――「この国は武力では守れないんです。北海道から沖縄まで、海岸線が縦に長い。大半が海岸線に住み、真ん中は高い山脈で国土の縦深性がありません。しかも海岸には、五十数基の原発があるんですよ。どうやって守るんですか。……戦前を見てごらんさい。本土を外で守ろうと朝鮮半島を併合し、その外が危ないと次に『生命線』だと満州に手を出す。そして北支です。それで結局破滅したのです。私たちは国を守るために外交的に国際協調主義でやるしかないんですよ。それが、リアリズムということなんです。国防上で見たら、軍備を強くするのは逆に一番危ない。」

からすれば、「戦前の日本も、中国大陆や東南アジアといった『大東亜共栄圏』の政治的、軍事的支配権を持たずとも（日本列島の本来の領土だけでも）、経済大国の道を歩むことは可能だった」（p.32）と評価している。同じく、室田元美「甲府の戦争と、石橋湛山——山梨県甲府市 山梨平和ミュージアム」（『自然と人間』第220号 2014年10月）も、「経済的なデータを」基にして「植民地主義は経済的にマイナスであり、相手国の民族自決を考えても反感を買うのは明らかなのにやっている、こんなバカなことがあるかと言った」石橋湛山の展示をしている山梨平和ミュージアム——石橋湛山記念館」を紹介し、彼が一九六八年に著わした『日本防衛論』から、「我が国の独立と安全を守るために、軍備の拡張という国力の消耗するような考えでいったら、国防を全うすることができないばかりでなく、国を滅ぼす。したがって、そういう考え方をもった政治家に託すわけにはいかない」という言葉を引用し、今日の右傾化に疑問を呈している。

学生たちは、少なくともこうしたもう一つの思考方法、したがって明治日本の進む道もあったのだという事実を知ってほしい。その上で歴史判断・評価があるべきなのである。

Ⅲ. DVD「戦争案内」と茂木氏の意見・歴史解釈

まずは、本稿の読者に、簡単ながらDVD「戦争案内」と茂木氏の意見・歴史解釈を紹介しておきたい。DVD「戦争案内」については、「主な映像内容」として次のような制作者自身による箇条書きがある——

＜明治維新からアジア太平洋戦争敗戦まで＞

- * 明治維新・資本主義社会へ・欧米視察・侵略体制整備
- * 朝鮮半島へ経済侵略・抵抗する朝鮮農民戦争
 - 弾圧のため日本軍派兵・20～30万人の農民を虐殺
- * 日清戦争・勝利して巨額の賠償金と台湾を植民地化
- * 資本主義社会の基礎を築く
- * 大地主、大資本家の天皇、世界一の大富豪へ
- * 中国へ侵略開始・日露戦争・中国旧満州を獲得
- * 張作霖爆殺と三井物産・冀東密貿易と三井物産
- * 中国で2,100万人を虐殺
- * 石原産業と2・26事件・アジア太平洋戦争
- * 日本企業の利権獲得
- * アジアで約3000万人が犠牲に
- * アジア各地で抗日、民族解放運動拡大
- * 日本敗戦

＜戦後の民族独立と新植民地化＞

- * 朝鮮民主主義人民共和国成立
- * 中華人民共和国、革命に成功

- * アジア各地で民族解放・独立の闘い
- * アメリカや旧植民地宗主国の再侵略
- * 勝利したベトナム、カンボジア、ラオス
- * 敗北した諸国に開発独裁政権樹立
- * アジアの開発独裁政権を守るため米軍基地、沖縄に設置
- <日本「第二の侵略」>
- * 85年プラザ合意で円高承認
- * 日本資本の怒濤のごとき海外投資
- * 開発独裁政権が保証する、公害垂れ流し、人権無視、組合弾圧
- * 暴力を伴った日本資本のアジア開発、投資
- * 「第二の侵略」・難民、犠牲者が多数発生
- * 開発・投資に反対するアジア民衆運動
- * 日本の憲法改悪・派兵
- * 真の平和のため、アジアの民衆と連帯強化を

これらを眺めるだけで、だいたいの内容が把握されるだろう。日本の資本主義の発達というものがいかにアジア諸国を犠牲にして行なわれてきたか、そして、それが今なお現代にまで続いていることを映像で提示している。とりわけ、後者の視点で歴史の連続性を分かりやすく説いているのが説得的である。つまり、過去の日本は戦争という点で他国に対してひどかったが、戦後の日本は経済オンリーで平和裏に他国と繋がっている、という意図的に広められた幻想を打破している点で優れている。

そして、次に私が学生たちに提示した茂木氏の歴史解釈だが、前掲『経済は世界史から学べ!』から――

日本は日清戦争（1894－1895年）に勝利して得た銀2億テールの賠償金を金280トンに交換して金本位制に移行しました。

金本位制の採用で世界市場と結ばれた日本は、絹織物をはじめとする工業製品の輸出で外貨を稼ぎ、これを軍事費に投じて日露戦争にもかろうじて勝利し、列強の一員としての地位を確保しました。一步間違えれば植民地や保護国に転落する時代ですから、明治の指導者たちは綱渡りのような決断を続けてきたことになります。 p.46

つまり、茂木氏の歴史解釈は、“ヨーロッパ・アメリカの列強諸国のアジア侵略のなかで日本は日清・日露戦争、朝鮮・台湾併合侵略などによってアジアで唯一の列強の一員となることができたのであり、そして今日の先進国の仲間入りを果たすことができた”，つまりは、“日本がアジア諸国を侵略しなかったら、日本はヨーロッパ列強に侵略されて植民地にされ、いまま後進国のままでいただろう”という通説そのものなのである。

そして、この通説を支えるのは、なにも権力を持った特別な人々だけではなく、じつは

多くの人たちなのである。このことは、日本の植民地支配は政治家・軍人によってのみ行なわれたのではなく、多くの庶民の「草の根の侵略」によって支えられていたことを検証する、高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』（岩波新書 2002年）が、「在朝日本人の朝鮮時代への対し方には、大きく分けて三つのタイプがあるようである。第一のタイプは、自分たちの行動は立派なものだったとするものである。第二のタイプは、無邪気に朝鮮時代を懐かしむものである。そして、第三のタイプは、自己批判しているものである。」(p.201)として紹介する、前二者によって示される。

たとえば、不二興業社長の娘は「朝鮮の実情に精通していると自負し、『朝鮮では雑穀の主食化が普通で、朝鮮人はむしろ米食よりこの方を好む』と書き、それなのに『日本は朝鮮に対して大いに搾取政治を行ったように記す、実情を少しも知らぬ机上学説のおそろしさ』を慨嘆した」。あるいは、「京城帝国大学教授で、大陸兵站基地論を展開した鈴木武雄は、戦後、大蔵省の在外財産調査会で中心的な役割を果たした。同会は、『日本人の海外活動に対する歴史的調査』（全三六冊）を秘密裏にまとめて、『日本の朝鮮統治が欧米列強の植民地統治にも勝って朝鮮人を搾取し、その幸福を蹂躪したという論告に対しては正当な抗弁の余地がある』『朝鮮の経済がこのようなミゼラブルな状態から、併合後僅か三十数年の間に今日見るような一大発展を遂げるに至ったことは、慥かに日本の指導の結果であると言うも過言ではない』と主張した⁵⁾。」(p.202) もうひとつのタイプは、元在朝日本人が作っている多くの同郷会・同窓会が出し続けている機関誌や単行本の中に限りなくあり、「それらを見てみると、次のような一節にぶつかることも多い。『私ももう一度、人生を繰り返すチャンスがあれば、再びアカシヤの花の香り漂う京城の街に住み、緑したたる南山の麓三坂小学校で、懐かしい旧師のもとに昔の仲間たちと、ともに学ぶ道を躊躇なく選ぶ』『あのまま、京城の生活をしていたら、このせせこましい内地なんて知らなくて、どんなにかおもしろい人生だったろうと思ったりします』⁶⁾」(p.204)。

ところで、先の茂木氏の見解については私はすでに前掲書評で言及しているので、ここでは、こうした茂木氏の認識はすでに学問世界では批判されているという、大谷正『日清戦争』（前掲）の指摘を紹介しておくにとどめる——「かつては、日本が西欧的な近代化政策を進めるためには、清を中心とする東アジア国際秩序の再編成は不可欠であり、明治維新以後の日本による朝鮮・中国侵略政策の延長線上に日清戦争は避けられなかったという見方が有力であった。つまり日本の政府も軍も、日清間の戦争を不可避と考え、準備を重ね、開戦にいたったという考え方で、現在でもこのような考え方が通説として流布している。しかし、一九八〇年代以降、研究者の間では、このような日清戦争必然説は実証的に批判されるようになった。」（「はじめに」）

5) 「これは、日本政府が韓国や台湾に対して、『だから賠償をする必要はない』と主張する根拠になった。」(p.202)

6) 「朝鮮人がこれを読んだら、どう思うだろうか。」(同)

Ⅳ．学生たちの意見

さて、以下に掲げる学生たちのレポートは、この春に私が担当していた「現代経営入門Ⅰ」の学生たちのものである。基本的には一回生であるが、再履修生（二～四回生）が数名いる。（現代）経営を学ぶためにはまず経済（学）を学んでもらわなくてはならないという私の教育的方法から、日本資本主義の歴史を取り扱ったなかの一コマとしてDVD「戦争案内」の鑑賞を準備したのであった。

以下に、学生たちのレポートを基本的にはそのままの形で列挙する。今日の若い人たちの歴史認識の一端が垣間見えるはずである――

①僕は、この判断は結果が良かったからいいけど、ほんとうによかったとは思わない。もし、負けていたら、日本が払ってもらっていた賠償金を払わないといけなかったかもしれないし、そんな賭け、スケールは少し小さいけど、今でいう、パチンコなんかと変わらないんじゃないかと思います。

話は少し変わってしまうけど、現に日本は、この戦争で調子に乗り、この後の第二次世界大戦で負けてしまいます。

日本が列強諸国と渡り合うには、こうするしかなかったと思うけど、この判断は、最終負けて失敗しているし、何より損失が大きいくらい僕はやかったとは思わない。

②私は今回の講義のビデオを見て日本はアジアの諸国を植民地にして日本の利益になるようなことしか見えなかった。そのようなことしかしてこなかった日本だが、列強の仲間入りをして、他国の学者にほめられているのは良いことではないと私は思う。多くの人間が殺されたり、死んだりしているのだから。ですが、列強の仲間入りできたからこそ、今は私たちは豊かな暮らしができているのであり、犠牲になった人たちのおかげであるので、感謝して生きていきたい。

③今の日本があるのは、明治の人達が厳しい戦争を戦い抜いたからこそある。しかし、当時の日本は、朝鮮の人々を奴隷のように扱い、厳しい仕事をさせ苦しめていた。一歩間違えば自分達がそうになってしまう時代だから仕方がないのですが、今の日本と朝鮮の仲が悪いのにも影響していると思います。

④日本が先進国になったのはよいことだが、映画を観たかぎりでは、すべての決断が正しかったとは思えない。列強諸国になることで多くの国民が犠牲になり、死んできたし、日本が決断をすることによって数多くの国も犠牲になったのだ。そこまで何百万人、何千万人の人の命を奪ってまで戦争をして植民地を作らないといけなかったのが理解できないし、いいことばかりではないと感じた。

⑤当時の指導者達は確かに素晴らしい決断をくり返し下すことで日本の植民地の拡大や地位を築いていた。しかし、その方法は野蛮なもので人間性が欠けていた。日本は資源も少なく、列強の国々に数えられることもなく、焦っていたということもわかるが、現在のように高い技術力をアピールし、加工貿易を行うことで、もっと平和で安定的に国

を繁栄させることができたのではないかという疑問をもった。

⑥茂木氏の文は日本は素晴らしい国で日本人は素晴らしいという風書いているが、この映画を見て日本がやったことは素晴らしいことかもしれないが、朝鮮に不平等条約を結ばせ、朝鮮人の生活を苦しめたり、フィリピンに会社を建て自分の国ではないからといって公害物質をラグナ湖に流し魚を殺してしまったり、人体に影響を起こしたり、最悪だと思います。一つ視点を変えれば、日本は最低なことをしていることがわかる。

⑦日本がここまで大きな国になれたのも他の国のおかげである。列強の一員になるためにはここまで他国を傷付けないといけないのは、とても残念なことである。昔はその植民地の人々を殺しても何も思わなくて今はひどいことをしたと思うと言っていた人がいたが、そのくらいの心構えがないと人を殺せないと分かった。日本などの大国は昔の植民地に沢山の工場を建てていて環境までも破壊しているのは、大変申し訳ない。このような列強の国々は他国から支えられていると考える。

⑧明治時代の指導者達の決断が立派と言っているけど、戦争をすることによって様々な被害が出る。それは、指導者達ではなく、いつも国民が被害を受ける。今日見たビデオでも植民地にするとといったことでも、家が破壊され暴力や飢えに苦しんだり爆弾による後遺症であったり様々な被害があつて、戦争に負けた国やその国民がとてつもない仕打ちを受けているので、私は侵略戦争を行なった明治時代の指導者は立派には思えず、別の道は何個もあったと思います。

⑨つぶし合いの時代なのかもしれないが、それに勝ったことを偉大と言っているとは思えないです。ただそこに勝利したおかげで、今、私たちが普通の幸せな暮らしができているのかと思うと、なんとも言えない気持ちになる。この時代では、それが正義だったのかもしれない。正義とは立場によって変わるものだと思っているので、なにが正しいかは分かりません。ただ、命の尊さはすごく感じます。命は誰もが簡単に扱っていいものではない。私はこの時代がすごく怖いです。世はこの歴史をくりかえしてはいけないと思います。

⑩たしかに立派な決断力かもしれない。しかし、強引すぎる。自国のことばかりを考え相手国のことは何も考えていない。この時代は、戦争や人殺しが当たり前であったから何も感じていないのかもしれない。しかし、今の時代から考えるとルールを守っていないし、強引にお金をとり、それを軍事費に使い、また同じことを繰り返すことは、とてもじゃないが考えられない。日本が列強国に仲間入りしたことには、こんな背景があることを知れてよかった。

⑪日本は侵略戦争を起こし、そこで人々、土地を奪い、日本にとって有利な条約を結び、賠償金を得て、金に交換し、金本位制を採用することで、世界市場を結びつくことで、列強諸国の仲間入りを果たした。

この侵略によって敗れると逆に植民地になるリスクを負って行動するには大きな決断が必要なので、明治時代の指導者は本当にぎりぎりの決断をし続けた。

⑫明治の指導者は、世界の列強の仲間入りをはたすために、ビデオを見た内容では、強

引なやり方で日本を成長させるための決断をしてきたことが分かりました。日清戦争では3億5千万もの賠償金を要求し、金本位制に変えることで世界市場の中で外貨を稼げるようになったことが大きかった。

しかし、日本が成長していくための決断では、植民地の人々は、人のような扱いを受けることなく働かされ、生活環境もたいへんひどいものでした。明治の指導者のおかげで今の日本があるが、その背景にいた人たちのことも忘れてはいけない。

⑬日清戦争と日露戦争で勝利した日本は金本位制に移行してその金を軍事費に回して、その後の戦争にも勝利した。この戦争に勝利した日本の背景には、ギリギリの決断をしてきた指導者たちがいる。この指導者たちのおかげで現在の日本、すなわち世界を代表する先進国になったのである。

⑭日本は強い国だと思う。やっていることはヒドイことだと思った。諸国の声も聞いていないことはだめだと思う。少しでも聞いてあげることをしてたら、もっと良いように進められたと思う。絹織物などを輸出して軍事費にしている。金本位制を使ったのは凄いことだと思った。一步間違えれば植民地になっていたので、その時代の人はずごくすごい人だと思いました。

⑮日本が列強の一員となるまでには、すごい決断をしたんだと思った。一步間違うと大変なことになるので、私だったらこのようなことはしたくないけど、この時代に生きていた人々は本当にすごいと思う。植民地として台湾を獲得したり、私たちが今生きていることは様々な歴史を通して今があるんだと感じた。

大戦によりたくさんの被害があったが、大変な時代に自分が生まれてなくて正直よかったと思った。明治時代に人の感謝して生きたい。

⑯日本人の判断は、私は正しかったと思います。他の国のことを考えると貧困におちいってしまう国もあるが、それは全てのことに於いて当然のことなので、私は正しいと思う。勝つ国もあれば負ける国もある。賠償金をとり他国をつきおとしたという形はとても残念にみえるが、その判断は正しいと感じた。

⑰日本は強い国と結ばれることによってどんどん栄えていったので、よかったと思う。

⑱すごく日本は横暴で、自分勝手なやり方で先進国になったことを知りました。日本の会社の特に三井物産は名前がよく挙がっていたが、綿布の利益、さらに大豆をも利益としていたことに驚きました。日本の冀東密貿易での関税の障壁を破壊して日本に利益を得ることができるようにし、中国の利益を出さないようにしていることに自分勝手なやり方が見られました。そして、日清戦争の利益を国が受け取っていた以外に明治天皇の利益になっていて、上ばかりが利益を得ていたことに汚いなと思いました。

最後の、フィリピンの話では毒ガスを撒いてフィリピンの人たちの生活を脅かし次の世代に影響を与えていて、最悪です。本当に汚いやり方で仲間入りを果たしたんだなと思います。

⑲日露戦争と三井物産、アジア太平洋と石原産業のつながりのおかげで今の日本があるのだと思った。

日本はアジアの一員となり先進国の仲間入りを果たせたが、戦争で何人も死者が出ているので戦争などせずに仲間入りした方がいいと思った。

⑩こんなひどいことをしてまで昔の日本は国土を広げる意味はあったのかと思う。どの国も平和に仲良く貿易していけたらいいのに。しかし、世の中は簡単に平和、平等などはなかったのです。

なぜ当時の日本は降伏してからもフィリピンなどにまた植民地にしようとしたのか謎です。一度降伏したのに同じ過ちをまた繰り返すのはなぜしたのだろうか。たぶん、昔の人は人を殺すことに何の感情も無く銃を撃っていただろう。上の人の命令にのみ働く機械のようだと思う。上の人は自分の利益のためや国の利益のためにやっていて他の国のことなんて考えていなかっただろう。

このDVDを見て自分たちの税金が他の国を苦しめるために使われるのなら払いたくないと思いました。でも、払わなければ当時はその人は殺されると考えると、どうしようもなかったです。

⑪日本はアジアの中でも唯一の列強です。今でも唯一の先進国です。黒船来航の際から今日までの発展はビックリするほどの速さでした。しかし日本は島国でありながらなぜここまで発展できたか。その理由は簡単なものでした。周辺国に対して侵略を行い、同時に日本の商社は他国に入り思うがままに価格を上げ下げしました。日本の1つ目の植民地台湾では台湾人が経営する砂糖工場が無くなり、結果的に0になりました。また中国の冀東で密貿易を行い、1/2～1/6の関税で中国に輸入を行いました。日本が発展していくうちに自然的に他国へのしわ寄せが目につきます。

⑫先進国の仲間入りを果たしたというのはすごいと思っていたが、今回の動画を見て考え方が変わった。

現在の日本は全く戦争をする気もなく、北朝鮮や中国の軍事行動に対してすごく批判しているが、正直、今まで日本がしてきた数え切れないほどの悪いことをしていたのに何を言っているのだと感じた。言う権利が全くないではないか。

日本の過去は最低である。最低なことをして先進国になったのである。確かに今ある豊かさは過去があったから出来ているわけでもある。それは否定できない。だからこそ、今、日本がすべきことは他国にもっと協力しないといけない。罪を償うことが大事である。私は日本の見方が正直悪くなりました。もっと罪を償ってほしいです。どういう風にするかは、例えばユニセフみたいに募金してお金を寄付する。もっといろいろな所にしていくべきだと思います。

⑬今日日本が唯一のアジアでの列強国となり先進国の仲間入りを果たしたが、映像を見て、他国を侵略して少しでも日本が有利になれば他国がとても被害を与えられていると感じた。日本は自国が持つ領土を少しでも多く広げようとした。それは、日本が列強国となり先進国となるには仕方がないことだったかもしれない。しかし、同じ人として他国をそんなにたくさん襲っていくことは少し強引すぎやしないかと思った。日本は他国にたくさんの犠牲を出してこれまでの強い国となったのだから他国にたくさんの感謝と

敬意を込めるべきだと思う私は、まだまだ考えが甘いのかと思った。

②④朝鮮や台湾の併合はあまりよくなかったのではないかと思います。植民地化を進めるよりも自国の政治にもっと力を入れるべきだったのではないかと思います。今、日本は先進国のうちの一つですが、政治的なことや中国などもめるといつもアメリカばかりを頼っているように思います。朝鮮併合をしたことにより今でも日本と朝鮮や韓国とは上手く関係を築けていません。昔に朝鮮を植民地化していなければ、現在もう少し日本と良い関係を築けていたのではないかと思います。

②⑤戦争や侵略を行ない、成功すれば大量の土地や金が入り国が豊かになるが、金が入るのは天皇や一部の政治家がほとんどで、戦争に協力的な意志をもたない国民は多かったのではないかと。国家の策略により上手くコントロールされて金儲けのためにこき使われた軍人がたくさんいたはずだ。反日思想の植民地の人々を虐殺するのを繰り返し、多くの命が犠牲になった。

②⑥私は歴史など全く知識がなく、このビデオのことも全く知らなかったのですが、見ていて戦争とは領土の拡大のためにだけじゃないんだと初めて知りました。戦争の裏には貿易のことであったり、賠償金のことであったり、産業のことであったり、たくさんのお金の問題が隠れていて、非常に複雑だなと感じました。このビデオで一番印象に残ったのはフィリピンの問題です。フィリピンの土地を奪ったりする資金は日本国民の税金(ODA)から取られていて、それについてあなたはどのように思いますか、という問いかけがありました。昔の話かもしれないけど、とても嫌だと思いました。今回のビデオは内容がとても難しかったのでうまくまとめることができませんが、先進国の仲間入りをするにはたくさんのお金が動いていて難しいと思いました。

②⑦日本は確かに列強国の一員となったが、少しやり方がひどすぎるのではないかと思います。自国・相手国双方に多大な被害と死者を出し、理不尽なやり方や汚い手口などを使っていたからです。この日本のやり方を見ていると、当時の日本は軍事力がついてきて浮かっていたのと、他の列強国を見て焦っていたのではないかと推測しました。いくら日本国民だからといってこの頃の日本のやり方には賛成できません。反日・抗日運動が起こるのは当然のことだろうし、敗戦するのも当然です。でも、その敗戦が今の日本につながっているのかなと思うと、負けるべくして負けたのだと思います。日本がもしあのまま勝ち続けていたら、今、日本はどんな荒れた国になっていただろうかと恐ろしく思います。

②⑧今の日本があるのは日清・日露戦争や朝鮮・台湾併合などのおかげだけど、日本がしてきたことは本当に最低だと思う。朝鮮にはすごく不利な日朝修好条約を結ばせたり、朝鮮側が国を守るために防穀例などを出した時には賠償金を支払わせるなど、自分勝手にもほどがある。それだけでなく、多くの人を何の理由もなしに虐殺し、せっかく何千もの工場を営んでいた台湾を攻撃しゼロにさせ、輸入・輸出のやり方も嫌がらせとしか思えない。かといって、今のような発達した日本があるのは、この時代の人たちががんばって創り上げたものだから否定だけするのは難しいのかもしれないが、日本が朝鮮・

中国・台湾にしてきたことは決して許されることではない。

これからは正しいやり方で発達し、企業拡大を進めてほしい。

②⑨ビデオを見て、明治維新からの日本は正直異常だと思いました。いくら列強や先進国に仲間入りするため日本が優位な立場に立つたためとはいっても、犠牲を出しすぎだと思います。たしかに、今、先進国といわれている国はひどいことをしてきた人達です。犠牲があったから今の世の中があって、自分たちは平和に暮らせているのだと思います。でも、ビデオを見る限りそこまでしなければならなかったのか、と疑問に思いました。朝鮮の人やフィリピンの人はひどい環境にも屈せずに、自分達を守るために立ちあがって戦っている姿は、本当にかっこよかったです。昔のことを今さらどうすることもできませんが、これから先の未来では絶対にこのようなことが起きてほしくないし、起こしたくないと思います。

③⑩映像を見て、日本は昔、意味のない戦争を繰り返したり、悪質な方法で様々な国へと侵攻したりして、今現在、中国や朝鮮などから恨みを買っているが、それは仕方のないことだと思った。実際、昔、日本はやり過ぎたせいでアメリカに負けて、先進国の仲間入りできたとしても、権力は低いのではないかと思う。しかし、日本は色々な戦争に勝ったからこうして先進国の仲間入りができたのかなとも感じた。もし、日本が先進国に入っていなかったら、今の日本はもっと住みにくく、経済面でももっと苦しかったんだろうと思った。

③⑪利益を上げるには犠牲はつきものだと思うが、これはただの殺人である。満州事変のときも計画を進めるにあたって邪魔だからといって爆死させる必要はなかったのではないかと思われる。植民地にされた国も日本のいいなりになってしまい、資源を渡さなければいけないが、国民を殺しては国自体が成り立たなくなってしまう。だが、その状態を作り出したのは日本なので、日本はもう少しやり方を考えるべきではないかと思う。現代のように話し合いでまとまる状態でなかった世界に問題がある。

③⑫朝鮮への侵攻で結んだ日朝修好条約、朝鮮での日本の不足の補い、デモに対する損害賠償で得た資金、日清・日露戦争で得た台湾・満州、砂糖・大豆といったその地域での物産品の輸出入で得た資金、フィリピンでの虐殺や占領など、その当時の人たちが世界で勝ちぬくためには必要なことだったと思う。また今の自分たちが先進国でいることができたのは、このようなことがあったからと思う。当時の生活、いまの自分たちの裕福な生活があるのはこういった出来事があったからだけど、ビデオを見て残酷なことをしてきたんだなと複雑な気持ちになった。

③⑬私の意見は、たとえ日本国民ではなくても朝鮮人など多くの人を殺したり捕まえたりすることは良くないことだと思う。

だけど、何かを取るためなら多くのモノを犠牲にしなければいけない。日本は初め台湾を植民地にしていた。その頃は完全に「力」がある人だけがまともな食事をとっていて、私はなぜ「力」がない人にはまともな食事がとれないのだろうと思う。数人だけが良ければいいのではなく全ての人が平等でなければならない。

逆に日本が台湾などに植民地にされていたらどうなっていたのだろうか。

V. 歴史を観る眼

見られるように、レポートには「こうするしかなかった」、「仕方がなかった」、「本当にぎりぎりの決断」、「すごい決断」、「当然のこと」など、思考を放棄するタイプのものが多いのに慄然とさせられるが、いまの時代を映し出す鏡でもある。また、それなりにDVDから学んでいる——だからこそくもうひとつの視点を提供する意味がある——ののだが、それでも残念ながら感覚的なものに——それがことの始まりであるが——とどまっているものが多い。私たちは、ここを出発地点とするしかない。

さて、本稿第I節で私の講義で基本的な歴史を話す意味などを書いたが、ここで歴史に関して興味深い二点を示しておきたい。ひとつは、歴史の豊かさというか流動性についてである。奥泉光・いとうせいこう『世界文学は面白い。——文芸漫談で地球一周』（集英社 2009年）が文学からの歴史の見方を対談している。

奥泉　そもそも過去の物語とは、誰かにとって都合よく編集されたフィクショナルなものです。そして、物語である以上、現在を脅かす心配もないし、たとえ忘れていた思い出がよみがえっても、物語にはまりこむ限りは心地よく感じられる。……

……僕が子ども時代のことを書くとします。ずっと忘れていた人との再会が、かりに鋳型外の記憶だったとしても、それを鋳型のなかに即座にはめ込んで安心する。過去の物語に回収する。つまり単純なノスタルジーです。そういう書き方なら簡単にできるだろうし、そういう小説は世の中にいっぱいある。でも、それは小説としてはつまらないだろうと思う。歴史ということでは、歴史は単なる過去の物語であるという立場になる。しかし、歴史は単なる物語ではない。

いとう　絶対的な真実なんて、だれにもわからないという意味ですね。

奥泉　そうともいえますね。過去というものは流動的なものであり、とりあえず、それぞれがそれぞれの物語を固着させてはいますが。

いとう　鎌倉幕府の成立は一一九二年、「いい国つくろう鎌倉幕府」と年表を覚えたものだけど、最近は一一九〇年ではないかと言われているのと一緒にかな。

奥泉　いとうさん、「レキシ」というバンドでそういう曲を歌ってますよね。

いとう　うん、「歴史プランニューデイ」という曲なんだけど（笑）

奥泉　歴史とは、いわば複数の物語がせめぎあうような場だと考えるのがいいんじゃないかと思うんです。そして、おそらくこの認識は、デュラス⁷⁾の小説スタイルや小説論とつながっているはずなんですよ。

いとう　鎌倉幕府時代のただなかで源頼朝の評価を誰もできないのと同様、デュラスに

7) マルグリット・デュラス（一九一四～一九九六年）。仏領インドシナに生まれたフランスの作家。

奥泉・いとう氏は、一九八四年に書かれた『愛人』について語り合っている。

とって母親の権勢が振るわれていた時代には母のことは書けなかったが、死んでしまいたいまでは、書けると。

奥泉　でも、その物語も固定せず、絶えず動いている。……デュラスは、そのとらえにくいものこそをテキストの中心に据えようとした。僕はこの方法論に、歴史というものを考える大きなヒントがあると思います。pp.230～232

二人が展開する歴史認識は固定的な歴史解釈への警告であり、それは通俗的で多数派の歴史解釈に対抗する「もうひとつの」歴史解釈に繋がる。

そして、もうひとつは、学生たちの《歴史知らず》を突破する方法としても私には参考になる具体的な教授法（?!）である。神野直彦『地域再生の経済学——豊かさを問い直す』（中公新書 2002年）は、「ヨーロッパは『市民のヨーロッパ（Europe of Citizens）』をめざし、ヨーロッパ委員会が組織した専門家グループが『ヨーロッパ・サステイナブル都市最終報告書』で『市場メカニズムに依存していたのでは、都市の持続可能な成長は実現できない』と、言下に拒否している」（p.9）時代に入っている⁸⁾という前向きな姿勢で混迷する日本の地方再生を訴えるが、そのなかに次のような説明がある——

日本において要素市場⁹⁾が成立するのは土地の売買が始まった明治時代になってからで、江戸時代までは存在していなかった。有名な桃太郎さんの童話の「お腰につけたきび団子 ひとつください お供します」という台詞は、江戸時代までは「お供します」ではなく「家来になります」だったようである。きび団子を与えることで封建的な身分関係を発生させていたものが、明治時代になってから「お供します」という労働の対価としてのきび団子に変わったということが出来る。これは明治時代になって初めて、労働市場が成立したことを象徴している。p.24

《歴史知らず》の学生たちを相手に話をするのには身近な話から封建制社会から資本制社会への移行の内実を説く必要性を感じているので私には大いに参考になる。この応用編を私も考えたいし、学生たちにも考えてもらうことで、いっそう効果が生まれよう。

さて、それにしても、「いまという右旋回の時代」が大いに問題である。平井康嗣・インタビュー「歴史とは人間がどういうものか学ぶこと——作家・半藤一利氏に聞く」（前掲）は、シビアナメディア状況を指摘する——

1928年6月に、関東軍が満州の軍閥政治家の張作霖が乗っていた列車を爆破した事件が

8) 「市場によらない地域再生」とは、「市民の共同の経済である財政による地域再生」で、「工業によって荒廃した都市を、人間の生活する『場』として再生しようとする」ものであり、「工業によって汚染された大気、水、土壌を蘇らせることが、市民の共同事業の中心テーマとなる。」（p.10）

9) 「要素市場とは人間が創造した生産物ではなく、神の創造物を取引する市場である。土地に代表される『外なる自然』、労働という『内なる自然』の産物を取引する市場を要素市場という。」（p.24）

ありましたが、当時の新聞はまだ健全で、これを厳しく批判していたのです。……

そのため、陸軍は学んだのですよ。「今度何かことを起こすときには、新聞を抱え込まないとこちらの思う通りにはならない」と。そこで繰り出したのが、陸軍指導部が各新聞社幹部を招いて「時局を理解してもらうために」という名目の会合を料亭で開き、機密費でご馳走するやり方でした。これで、すっかり新聞が軍の手の平に乗ってしまった。まずムチでなく、アメを与えたのです。

——今でも、マスコミ各社の幹部が安倍首相と飲み食いしています（笑）。それと、似ている¹⁰⁾。

しかしそれだけではなく、当時はラジオという新たなメディアが登場したことを忘れてはなりません。速報性という面では新聞はラジオにとってもかなわないから、号外を何度でも出す必要性が新たに生まれました。そうすると、軍からこれまで以上に情報をもらわないとやっていけなくなる。そのため、さらに新聞は軍との協力関係を深めていきました¹¹⁾。

——張作霖爆破事件の後、今度は31年9月に満州事変が起きます。

これも関東軍が、南満州鉄道の線路を自分で爆破するという謀略によって引き起こしたのですが、その頃になると……各紙は、ほとんど批判精神を失っていましたね。数少ない例外は、『大阪朝日』でした。9月18日に満州事変が起きてから戦争反対で何とか頑張っていたのですが、10月12日になって遂に白旗を掲げる。在郷軍人会が、かなり激しく不買運動を起こしたのです。奈良県に至っては、部数が何とゼロになりました。

それで参ってしまい、編集局長……が役員会で、「現在の軍部及び軍事行動に絶対批判を下さず、極力これを指示すべきこと」と述べ、軍に協力しないと成り立たないとして方針転換したのです。この秘密会議の内容が、憲兵調書に載っているのです。社内に、スパイがいたんでしょうね¹²⁾。

10) 福島原発事故のときに東電社長は日本にいなかった。新聞各社の幹部とともに中国に旅行中だったという。これも接待の実態の一部であろう。

11) 「新聞はラジオの速報性に対抗するために、コストをかけてイベントを仕組んだ。戦争ニュース映画会、写真展、派遣軍への慰問金、慰問袋、慰問の手紙の募集、軍歌の募集、軍用飛行機献納運動など戦争協力を積極的に行なった。このコストを回収するためには部数拡張をしなければならず、そのためにますます『時局』と『大衆』に迎合して戦争報道にのめり込んでいった。」(山口隆『4月29日
エシベラズ・バースデー
ユンボンギル
の尹奉吉』社会評論社 1998年 p.222)

12) 「戦後生まれの私にも、『戦争中のジャーナリズムはこんな空気だったのかな』と思わせる、この何か月かの『朝日叩き』の異常さである。／『慰安婦』をめぐる報道の一部に間違いがあったといっても、国連が発言しているように、事の本質は少しも変わらない。もともと『強制』という点を世界は問題にしていないのであって、『慰安婦』の存在そのものが人道的な罪なのだ。『朝日叩き』で、慰安婦の存在自体を否定しようとするのは、国際社会と日本との人権感覚のずれの大きさを浮き彫りにするばかりである」と言う、赤川次郎「楽しく、くたびれた日」(『図書』2014年11月号)は、九十九歳の現役ジャーナリストむのたけじ氏との対談について次のように書いている——「戦時下、軍部による新聞への弾圧や脅しはなかったと聞いたのは意外だった。軍部としても、当時世間への発言力の大きかった新聞に暴力を働くことは避けていたのだ。新聞の『戦争協力』は、決して脅さ

これに関連して、西川伸一の「政治時評 言論空間の委縮広がる いま試されている勇氣」(『週刊金曜日』2014年10月17日号)によれば、さいたま市の三橋公民館の俳句教室で選ばれた句(「梅雨空に『九条守れ』の女性デモ」)が「世論を二分しているものは月報にそぐわない」と主張する市教育委員会によって公民館の月報「公民館だより」への掲載を拒否された¹³⁾り、明治大学で予定されていた「安倍政権と平和・原発・基地を考える緊急集会」が開催一週間前になって大学側によって会場利用が拒否された、という。

また、「巨悪はこわくてさわれない。小悪は叩いてもおもしろくない。結果的に『中悪』にバッシングが集中する」という「中悪叩きの法則」を唱える、斎藤美奈子「朝日騒動があぶり出した言論が死滅する日」(『DAYS JAPAN』2014年11月号)も、今日のマスコミ状況を的確に指摘している――、

「中悪叩きの法則」……2007年、不二家、ミートホープ、赤福などの消費期限改ざん事件が続いた際に書いたことだった。ちょうど東京電力の原発の設備にかんするデータ改ざんが発覚した時期で、このようにして巨悪はまんまと逃げ伸びるのだと。

今度の「朝日バッシングの――池野注」場合も、同様の構図があてはまる。慰安婦問題において巨悪、すなわち最大の問題が、軍の関与や強制性を認めず、国際的な孤立への道を歩みつつある安倍晋三政権にあるのは明らかだろう。原発事故についての巨悪が自民党政権と東電であることも自明である。が、悪の側につくメディアは、ここぞとばかりに中悪叩きに血道を上げる。

対象が別の新聞だったら、こうはならなかったはず。朝日の誤報を糾弾する読売や産経とて、過去に何度も誤報を打っている。ハーバード大学研究員・森口尚史氏の証言を真に受けた「iPS細胞を使った世界初の心筋移植手術に成功」(読売新聞12年12月)とか、「中国の江沢民前国家主席が死去」(産経新聞11年7月)とか。しかし、ここまでの騒ぎに発展しなかったのは、読売や産経の信頼度が最初から「その程度」だったから

れてやむなくのことではなく、『自主的』なものだった。」また、マイケル・ベン「NHKは御用放送局か――英紙が内部文書暴露」(『週刊金曜日』2014年11月7日号)は、英国の『タイムズ』紙の「東京支局長が入手したNHK(日本放送協会)の内部文書によると、同社[NHK]の記者や編集者は、靖国神社や南京大虐殺、『慰安婦』問題、中国との領土問題などのデリケートな問題に言及する際、使用すべき、あるいは避けるべき表現を厳密に指示されているという。安倍政権とNHKの癒着を示すもので、NHKは権力側からの情報統制を受けた『御用放送局』という批判を受けよう」と指摘している。

- 13) 「世論を二分しているものは……そぐわない」という言い方・論理は、やはり原発についても推進側が反対派の動きを封じ込めるために盛んに使われた。たとえば、新聞や地下鉄の意見広告に反原発を訴えようとしても、国論を二分する意見については認めない、と拒否された。国や電力会社など原発推進側の意見は無批判に掲示しているにもかかわらず、である。

なお、前掲・西川伸一氏によれば、「俳句といえば、『昇降機しづかに雷の夜を昇る』という句を詠んだ俳人が、1940年8月に特高警察によって検挙された。特高はこの句を『雷の夜すなわち国情不安な時、昇降機すなわち共産主義思想が高揚するという』と想像力豊かに判断した。当の俳人は『呆れかえって笑うにも笑えなかった』(田島和生『新興俳人の群像』思文閣出版)」という。

だろう。

一方、朝日新聞は他紙に比べてクォリティペーパーとしての権威を保っており、しかも……政府を批判するなど「反安倍政権」の姿勢を打ち出していた。政府の広報誌と化した新聞や雑誌にとっては、おあつらえ向きの標的である。

VI. 日本資本主義の歴史を見る眼

さて、まとめに入ろう。学生たちにはレポートを書いてもらった講義の時点では、私が前掲の茂木氏の書評で紹介した、米原万里『打ちのめされるようなすごい本』（文春文庫 2009年）に書かれているような視点を提示していなかったのも、ここで確認を兼ねて、そしてまた本稿の読者のためにも再掲しておきたい――

教科書〔「新しい歴史教科書をつくる会」の中学校用歴史教科書＝西尾幹二他『新しい歴史教科書——市販用』（扶桑社）〕には、日露戦争が欧米列強の植民地にされた国々の指導者たちを励ました例が示され、「もし日本がもっとも強大なヨーロッパの一国に対してよく勝利を博したとするならば、どうしてそれをインドがなしえないといえるだろう？」というネールの『父が子に語る世界史』からの言葉が紹介されているが、検証側〔小森陽一・坂本義一・安丸良夫編『歴史教科書——何が問題か 徹底検証 Q&A』（岩波書店）〕は、同じネールでも『自伝』の方の「日本のロシアに対する勝利がどれほどアジアの諸国民をよろこばせ、こおどりさせたかということをわれわれはみた。ところが、その直後の成果は、少数の侵略的帝国主義のグループに、もう一国をつけ加えたというにすぎなかった。その苦い結果を、まず最初になめたのは朝鮮であった」という文章の方が、日本の勝利の二面性を伝えていて引用に相応しいと提案している。

もちろん、私は、小森陽一・坂本義一・安丸良夫編『歴史教科書——何が問題か 徹底検証 Q&A』（岩波書店）が提示する視点のほうがアジアを踏み台にした日本の「成長」・「発展」（「脱亜入欧」）の意味を考える際に大いに参考になるだろうという立場である。

また、竹内好「明治維新と中国革命」（1967年 『竹内好全集』筑摩書房 第四巻 1980年 所収）も『父が子に語る世界史』からの言葉を紹介し、日露戦争での日本の勝利の報を聞いたスエズのアラビア人が、「東洋の有色人種は、いつも西洋の白色人種の圧迫を受けて、立つ瀬がなかったが、これで希望がわいた。日本人の勝ったのは、自分が勝ったようなものだ」と熱狂していたことを孫文が神戸での講演で語った、と紹介している（pp. 349～350）。それほどに、日露戦争「勝利」の衝撃は大きかったのだろう。竹内氏は、「日露戦争には、国際的に見て、アジアの復興と植民地の独立の機運をうながしたという一面の功績も認めなければならない」と言いつつも、それでも「帝国主義的侵略である」ことをしっかりと指摘している（p. 350）。

そしてもう一点。日本という国の単位でしか歴史を見ない通説のなかで教育が行なわれてきたこともあって、ともすれば学生たちは安易に「日本は……」と括ってしまっている

問題である。生方敏郎『明治大正見聞史』（中公文庫 78年）は、日清戦争について「国民」という視点から、しかも都会と地方という区別をして、後者にとっての事態を描いている――、

戦時中、国民はずいぶんの重税を負担した。私はまだ子供の時で、税金のことまではよく知らなかったが、世にいわゆる三悪税なるものは、この戦争及び日露戦争中の所産ではなかったか？ 少なくとも通行税はこの時であったと記憶する。人々は無理さんだんまでして軍事公債にも応募した。愛国婦人会、赤十字、義勇艦隊、軍人後援会などというものの勧誘は、主に知事から郡長へ、郡長から町村長へと天降りて来たので……柔順なる地方農民は、それこそ無け無しの財布の底を叩いて義捐した。……

「ここいらから出て行く金は、ことごとく東京や広島宇品あたりへ落ちるんですから、彼地の者は大儲けですが、田舎の者はつまりませんや」

と前橋から来た問屋の番頭が店先で語った。傍らで買物をしていた村の人は、

「こちとらは、何があっても損するばかりだ。田舎漢はつまんねえ、む。土ん百姓は智慧無しに生まれ付いてるだから」

と風呂敷包みを背負いながら言った。

実際、大都会には、この戦争のために大金持になった人々もあったのだ。金持になった上に爵位まで得た人々もあったのだ。大正日本のブルジョア階級の基礎は、大抵この戦争の際に出来たのだ。

だが、地方には戦争で財布の底を叩いた人々こそあれ、一文だって金儲けをした人々はいなかった。

pp.48～49

この視点との関連で言えば、「日清戦争で日本は勝った」というものの¹⁴⁾、いったい戦場で実際に戦ったのはどこの誰なのかと言え、やはり日本の「国民」であった。大谷正「戦場の男性」（阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史Ⅰ 男たちの近代』日本経済評論社 2006年）によれば、日清戦争参加総兵力は240,616人、日本人軍夫153,974人、現地人軍夫12,110,000（延べ雇用人数）、戦死者13,309人（軍夫を加えると20,000人以上）、日露戦争参与総数1,243,356人、戦死者約84,000人であった（p.135）。

上の数字にある、軍夫とは、北原糸子「もうひとつの日清戦争」（大谷正・原田敬一／共編『日清戦争の社会史——「文明戦争」と民衆』（フォーラム・A 1994年 第五章）

14) 「日清戦争は軍事的には清国を圧倒しながらも、政治的には失敗の戦争であった。三国干渉をみちびきだして、戦争目的であった朝鮮内政改革＝朝鮮の植民地化を達成できなかったからである。それは中国の本格的分割の出発点となり、アジアに帝国主義体制を成立させた。残るところは朝鮮および台湾の民衆を抑圧し奴隷化したことのみであった。日清戦争は、それゆえ、アジア民族の立場からいえば、痛飲すべき戦争以外のなにものでもなかった。／そのため、日清戦争の真実をあきらかにする試みは、一九四五年まで権力によってきびしく禁止されてきた。」（前掲・藤村道生『日清戦争』「序文」p.ii）

によれば、「日本陸軍の当時の実態は、近代戦に必要な輸送力を人馬に頼るしかない前近代段階にあり、しかもその代替を軍隊内部で構成する力を持たず、人夫請負を通じて調達した非戦闘員である軍夫に負わしめた。彼ら非戦闘要員である軍夫を戦闘員同様の位置に置いたという点で、国際軍事法を侵犯したという非難を免れない立場にあった」(p.165)という位置にある。そして、じつはこの軍夫が「大きな犠牲を国家によって強いられた」¹⁵⁾、と大谷正『『文明戦争』と軍夫』(同上 第六章)は言う——「彼ら軍夫のなかから、日清戦争の総死亡者二万数千人のほぼ三分の一に達する犠牲者が生まれたのである。これが筆者の主張する、日本の民衆が体験した『もうひとつの日清戦争』の実像であり、従来の日清戦争研究はこれを無視してきたのであった。」(p.224)

ところで、こうした人数というものが当時の日本においていったいどれくらいの意味を持つかについては、松崎昭一「解説 日本の大陸政策」(NHK取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』角川文庫 1995年)が次のように説いている——

日露戦争が決着した奉天会戦終了時の……日本満州軍は約四八万人で、当時の日本の総人口は約四七〇〇万人。ということは、銃をとれるような男性は根こそぎ動員されたにひとしい。つまり人的国力は崩壊の臨界点に達していたといえよう。 pp.290～291

このことから、日清・日露戦争においてどれほどの人びとの犠牲の上に「日本の勝利」があったのかを、もう一度あらためて考えておかなければならないことが分かる。

そして最後に、人々の視点ということに関連して。それは、明治維新当時の人びとの認識に関わってのことである。

高杉晋作といえば誰しもが知っているであろう人物であるが、彼の中国認識が残されている。丸山昇『上海物語——国際都市上海と日中文化人』(講談社学術文庫 2004年)が、高杉晋作が二四歳のとき、一八六二年、ペリー浦賀来航から九年後、幕府の官船千歳丸に乗って上海を訪れた折に記した日記や、清国人との筆談の記録、それらへの書きいれなどを紹介している¹⁶⁾。そのなかに、ヨーロッパに蹂躪されている中国人を見て日本の将来を

15) ことはそう単純ではない。「加害者としての軍夫という問題である。軍夫は強制的に徴兵された兵士と違って、自発的に、多くは高給につられて参加したのであった。彼らは、野戦師団、兵站部隊の中で、背負子を背負い、大八車を引いて苦しい輸送業務にあたったが、戦地の住民に対しては、しばしば加害者として登場した。彼らは戦地では私的利益を満たすために、あるいは十分な食料・防寒具がない中で生き延びるために、略奪を行い、暴行・強姦・殺人等も行い、公然と武器を携帯する場合もあった。」(大谷正・前掲『『文明戦争』と軍夫』p.224)・「軍夫も殺害に参加した。軍夫丸木某の『明治二十七八年戦役日記』には、旅順近郊で『悪口なす』捕虜に皆で水を浴びせると『体は紫色に変じ氷死』した、あるいは軍夫百人長が捕虜の試し切りをする記述がある。一方で防寒衣がないために凍死する……軍夫もいた。『単への半天、同股引き』という軽装の彼らは、『悪いと知りつつチャン公のきもの徴発』して寒中で生き延びた。日本軍の内部で差別された軍夫は、しばしば中国人にとって最も危険な存在であった」(大谷正・前掲『戦場の男性』p.158)。

16) 瀧井一博『明治国家をつくった人びと』(講談社現代新書 2013年)も高杉晋作の上海体験を紹介

憂いている記述がある——,

五月六日、早朝川蒸気船が来、本船を引いて、左折、江をさかのぼる。兩岸の民家の風景はほとんどわが邦と異ならない。右岸にメリケンの商館がある。かつて長髪族と支那人がこの地で戦ったという。午前、ようやく上海に着く、ここは支那第一の繁盛する港である。ヨーロッパ諸国の商船軍艦数千隻が停泊、マストが林立して、港を埋めんばかりである。陸上には諸邦の白壁千尺を連ね、まるで城閣のようである。

そして上の欄外には、つぎの書き入れもある。

上海は外国船の停泊するもの常に三四百隻、その他軍艦十余隻という。

支那人、外国人に使役されている、憐れ。わが国もついにこうならねばならないのだろうか、そうならぬことを祈るばかり。

外国人に使役される中国人の姿が、^{こうほこう}黄浦江に停泊する船の数や、岸に立ち並ぶ外国商館の威容とともに、最初に出てくることに注目される。これが高杉の上海第一印象だった。この点、ほかにも何カ所かでくり返される。

五月二十一日、骨董店に行き、書画を見る。この日は終日閑坐、そこでつらつら上海の状況を観るに、支那人はことごとく外国人の使役である。英・仏の人が街を歩くと、清人はみな傍に避けて道を譲る。実に上海の地は支那に属するというものの、英仏の属領といってもいい。

pp.46～47

高杉晋作の心配——「支那人……憐れ。わが国もついにこうならねばならないのだろうか、そうならぬことを祈るばかり」——は、ヨーロッパに侵略される前にやむを得ずアジアを侵略したという今日の通俗的な歴史認識を正当化するものかもしれない。じじつ、学生たちのレポートにそれを窺わせるようなものが多かったのは、すでに見た。が、しかし、高杉の記述のなかにある、「かつて長髪族と支那人がこの地で戦ったという」に関連して、そうした通俗的な認識を否定する解釈がある。なお、「長髪族」とは太平（天国）軍——洪秀全（1818－1864）が率いた農民軍——のことであり、丸山氏によれば、「高杉の日記には、銃声・砲声が聞こえたことが何度か記され、五月十日の項には『黄昏、オランダ人が来て、長髪族が上海から三里の地に来ている。明朝は砲声が聞こえるだろう、という』

しているが、加えて、その五年後（一八六七年）にフランスへの使節団の随員であった渋沢栄一のそれをも紹介している——「渋沢が見たのは、繁華な租界地と城壁の中へあたかも押し込められたかのような悲惨な中国人街との好対照だった。中国の土地をわがもの顔で闊歩する西洋人と彼らに酷使される中国人とのコントラストは、日本にも迫ろうとしている西洋文明の本質をみせつけるものだった。」（p.148）

とある。……したがって高杉らは、清朝が太平軍に備えて、英・仏軍の力を借りているさまを見ていた。」(pp.47～48)

さて、解釈（歴史認識）の問題である。「清朝が太平軍に備えて、英・仏軍の力を借りている」ことと、それがヨーロッパ列強と日本の関係にどのように関係するかについてであるが、安藤彦太郎編『現代中国事典』（講談社現代新書 1972年）のなかの、小島晋治氏の以下の文章がそれについて述べている――

【[太平天国の] 明治維新との関係】一八六三年幕府の千歳丸に便乗して上海を訪れた高杉晋作らは内乱鎮圧に列強の援助を求めた上海が植民地に等しくなっていることや、太平軍の列強への抗戦について見聞し、ここから多大の教訓を得た。彼の同志久坂玄端は藩主への上書の中で、太平天国を天草の乱と同一視しながらも、その対外抵抗が、日本に対する英仏の武力攻撃を制約していると指摘した。たしかに太平天国はこれと同時代のインドのセポイの乱、ペルシアの反英抗争とともに、イギリスの外交当局に大きな教訓をあたえ、幕末日本にたいするイギリスの政策を中国など、アジア諸国にたいする強引な武力干渉政策と異なるものとなさしめた。この意味で、太平天国は明治維新と浅からぬ関係をもっている。
pp.252～253（傍点強調――池野）

つまり、中国の人びとやインドの人びとなど世界中の人びとのそれぞれ現地での闘いの結果として、当時の、したがって今日の日本は存在しているのである。その視点を当時の高杉はまだ持てなかった。それは、奥泉光・いとうせいこう『世界文学は面白い。』（前掲）が言うところの、「鎌倉幕府時代のただなかで源頼朝の評価を誰もできないのと同様に、やむを得ない限界なのである。しかし、現代を生きる私たちにはそうした限界はない。固定的な歴史解釈にこだわる必要などなく、通俗的で多数派の歴史解釈に対抗する「もうひとつの」歴史解釈にチャレンジすることができるのである。

この視点が重要なのは、白井久也『明治国家と日清戦争』（前掲）が言うところの、次のような、あり得たもうひとつの道を想像することができるからである――

日清戦争に勝った日本は、清国に台湾と澎湖列島を割譲させ、アジアで初めて植民地を持つ国になった。しかも、日清戦争で自信をつけた日本は、日露戦争、日中戦争と侵略戦争を推し進め、ついに太平洋戦争へ突き進んで行った。明治維新後の近代日本は、欧米列強の侵略に対抗して、アジア諸国との連帯によって独立を守る道を選ばずに、自ら欧米列強の「極東の憲兵」となって、アジア諸国を侵略しながら国力を発展させた。そして最後は欧米列強との覇権争いに敗れて、破綻する運命をたどった。われわれはこの事実を直視せねばならない。
p.11（傍点強調――池野）

また、一九七二年の日中国交回復で周恩来首相が「一八九四年から半世紀にわたる日本軍国主義者の中国侵略によって、中国人民はきわめてひどい災難をこうむり、日本人民も

大きな損害を受けました」と述べて「日清戦争を起点とする日本国家の侵略主義¹⁷⁾を指弾した」のは、「今日の日本人が……実に日清戦争までさかのぼらなければ見えない、解決できない多くの問題を抱えている」ことを語っていると読む、又吉盛清『台湾支配と日本人——日清戦争一〇〇年』(同時代社 1994年 p.28, p.17) も言う——,

日清戦争の戦争目的は……朝鮮の植民地化を狙ったものであった。この戦争目的は、この時は達成できなかったが、日清戦争は、「決定的」ともいえる数々の「負の遺産」を残し、その負担は今日まで続いているのである。

それは、中国分割の本格的な出発点になり、アジアに帝国主義体制を成立させるものになった。朝鮮と台湾住民を抑圧、奴隷化した。一八七四年(明治七年)の台湾出兵から始まる琉球の帰属問題に最終的な決論を出し、沖縄を「内国植民地」として扱い、偏見と差別を増長させ、沖縄戦の大きな犠牲につながった。

日清戦争は……侵略戦争であったが、「文明と野蛮の戦い」(福沢諭吉)、「日清戦争の義」(内村鑑三)と論じ、新聞論調は主戦論を展開した。国民は「聖戦」に熱狂するという、挙国一致の翼賛体制がつくられ、危険な「国民戦争」の実態が明らかになった。

また、第二軍の旅順大虐殺や、天皇の親兵である近衛師団による台湾大虐殺に見られるように、これが日中戦争における南京大虐殺など、日本軍の占領地における兵士、住民の一連の虐殺事件の“原点”ともなった。

日中戦争における日本軍の虐殺事件は、日清戦争の勝利によって、小国日本がアジアの「大国」、世界の「一等国」になったおごりが、総じて朝鮮、中国(シナ人というようになった)への蔑視を生み出し、強ければ何をしてもいいという気分を醸成させた。やがて、このようなことが、日本人が侵略軍であることを忘れさせた南京大虐殺にもつながっていく、伏線の一つになったのである。

それはまた……アジアを未開、野蛮と見なすものになっていき、侵略戦争を「アジア解放」といいくろめたり、「大東亜共栄圏」の名を冠して戦うようになるのである。

このように日清戦争は、朝鮮、中国、アジアとの連帯と共生を断ち切るものになり、日本はアジアの植民地帝国、「極東の憲兵」として、「抑圧された国」から「抑圧する国」となって日本人が立ち現れるのである。 pp.16~17 (傍点強調——池野)

17) 「一八九四年から半世紀にわたる日本軍国主義者の中国侵略」・「日清戦争を起点とする日本国家の侵略主義」という周恩来の認識は中国のものだけではない。日本の学界でも共有されている。たとえば、藤村道生『日清戦争』(前掲)も言う——「日清戦争は、日本をアジアにおける民族運動の抑圧者として確定した。……列強は、中国を分割し合う準備ができていなかったから、日本に同調して分割競争に着手するよりも、それを将来にのばす道をえらび、ロシアはドイツ、フランスを連ねて干渉した。……日本は三国干渉に屈し、朝鮮においても後退しなければならなかったが、甲午農民戦争を圧殺した……植民地領有『帝』国となり……主役の一人としてつねにくわだった。……/日清戦争は、その意味で以後五〇年にわたる日本帝国主義の中国侵略戦争の発端をなすものであり、一九四五年の日本帝国主義敗北にいたる日中五〇年戦争の第一次戦として位置づけられるべきである。」(pp.230~231)

以上のことから、日清・日露戦争をはじめとする日本資本主義の歴史を観る際に、国と国民、都会と地方・農村、階級といった区別を持っていないと具体的な把握ができないし、もうひとつの選択肢が見えないことが理解できる。たとえば、「明治一七年一月三日（天長節）の際の鹿鳴館での晩餐会メニュー……生牡蠣レモン添え、ウィンザー風ポタージュ、コルベールソース仕立て鯛のグラタン、ペリゴール風きのこのソース添え牛フィレ肉ステーキ、セロリのピュレ添え鶏のロースト、雉肉のゼリー固め、洋梨のシャーベット、ロースト七面鳥風のサラダ、英国風絹さやのあえもの、プラム・プディング、アイスクリーム（コーヒー味）」（中谷和弘「外交の面子」『書斎の窓』2014年9月号）を食していた人々と農民たちとを同列に見ることなど不可能である。

にもかかわらず、一元的な国民という理解が横行している。これについては、日清戦争が「国民」を生んだことによって「この戦争を境にして日本社会のありかたが大きく変化した」・「社会の見えかたがすっかり変わってしまった」という、佐谷眞木人『日清戦争——「国民」の誕生』（講談社現代新書 2009年 p.7）が、第五章「熱狂する人びと、祝捷の空間」で、「民間人が私設の『軍隊』を結成し、戦争に加わろう」と「全国各地に続々と義勇軍が結成され」（p.144）たり、「貧乏こそすれ国民の一人」といって「義損金献納運動は、より幅広い社会層を巻き込んでいく」（p.149）事態を描いている——、

たとえば、八月十日の『読売』は、大阪西成の役場に、赤貧の家族が五円の献金を申し出たという『美談』を大きく取り上げている。役人が驚いて「夫にしても平常有り余るという身代しんだいでもない様子ようすなるに、何して此金を拵どうへしぞ」と尋ねたところ、「貧乏こそすれ国民いちにんの一人、何卒我等生涯どうぞのうち、何かお国の為になる事をして、お天子さまへ御恩報じがいたしたいと存じ」て、毎日、一厘、二厘ずつ貯めたものが三円になったという。また、残りの二円は子どもたちに浴衣を買ってやろうと思って取っておいたもので、子どもたちが、浴衣はいらないから献納してほしいと言った、との答えであった。これには派出の警官も感涙を催したという。

この美談には、貧富の差にかかわらず、誰もが「国民」として「報国」の義務を負うという強烈なメッセージがこめられている。そこでは、義損金を媒介として、一般国民と「国家」あるいは「天子さま」が直接結びついていることに注意が必要だろう。そのような関係こそが、日清戦争によって内面化された国民国家のイメージなのである。

pp.149～150

そもそも、どうしてこの一元的な国民という把握の仕方が生まれてしまっているのかについては、山口隆『エンペラーズ・パースデー エンボンギル 4月29日の尹奉吉』（前掲）が次のように説いている——、

ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』で「たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ国民は常に水平的な同志愛として心に思い描かれる。この想像力の産物のために、過去二世紀にわたり数百万の人々が、殺し合い、

あるいは自らすすんで死んでいったのである」と語ったように、「想像力の産物」を「絶対化」して「自らすすんで死んでいった」過去を持つ日本人は、今こそ、歴史を冷静に見つめ直さなければならない。 p.262

Ⅶ. お わ り に

私が学生たちの《歴史知らず》を問題にするのは、それが、じつは学生たちは歴史を「知らない」のではなく、通俗的な「常識」的歴史そのものに安住していることにある。いまという混迷する時代においては、それがより一層の問題だからである。

城戸久枝『あの戦争から遠く離れて——私につながる歴史をたどる旅』（文春文庫 2012年）は、『中国残留孤児』という言葉がメディアを賑わす一〇年以上も前の「一九七〇年に『満州孤児』という呼称で」（p.17）中国から帰国した父をもつ著者が自分と歴史の関わりを追うノンフィクションであるが、その父の父、つまり著者の祖父を辿るなかで当時の青年が「満州に向かったときの心境を……書きしるしている」満洲国軍日系軍官四期生誌を引用しながら祖父の姿を推察する――

《日本の生命線は満州大陸にありと、ことある毎に指導され、教育されてきた。我が国の先達たちは、スラブ、アングロサクソン、ゲルマン民族等、白色人種のために危うく植民地化されんとしていたアジアの諸国特に支那、朝鮮を日本の国力を賭けて戦い、食い止めて来たのであった、その大きな犠牲の上に支払われていたとしては、あまりにも少ない代償である南満州鉄道の権益を守ることは、我々の当然の責務であると考え、青春の血を湧かすことに何の蟠りもなかった。特に国際連盟を、列強の圧力によって脱退させられ、孤立状態にある日本を守るのは、若者以外にないと自覚し決起することも、当時の社会的風潮からまた当然のことであった。そして一日も早く国内の不況を打開して繁栄する日本にしなければならないという気迫と愛国心が、当時の若者にはみちみちていたのである。

丁度その頃、満蒙の地に理想国家建設のための基礎となるべき、日系軍官募集の記事が新聞紙上に発表されたので、これこそが国策にそなえる唯一の途であると、勇躍飛び込むことになったというのが我々四期生の当時の心境であったと思う。》

経済不振にあえぐ祖国日本を列強から守るために、自らが満州へ渡り、新たな理想国家建設の礎になりたい……純粹でまっすぐな気持ちで祖国を離れて満州の地に降り立った多くの日本人青年のなかに、きっと祖父もいたのだろう。 pp.434～435

「純粹でまっすぐな気持ち……の日本人青年」たちが信じていたのは、間違いなく作られた歴史観であった。しかし、時代のせいというのは逃げ口上でしかない。「もうひとつの考え方」である小アジア主義はすでに唱えられていたのだから。《歴史知らず》とは、常識的な歴史観のままに在ることであるとすれば、その行先は、やはり今日もまた「満州」しかないのであり、だからこそ、歴史認識にこだわりたいのである。

そして、最後に。日清戦争の争点となった朝鮮という国が当時の日本資本主義、まさに後発国として帝国主義列強に伍していこうと喘いでいた日本にとってどういう意味を持っていたのかの問題である。この理解の上での歴史認識が求められる。藤村道生『日清戦争』（前掲）が、これについて簡潔に言う――

当時の労働者階級の状況は、『職工事情』や『女工哀史』以上に悲惨であったが、明治国家はこれを放置していた。一八九四年は、義務教育を標榜した小学校令を公布してから八年経過していた。しかし、愛知県下の繊維労働者中、小学校卒業程度は男工で二・一・三％、女工で三・二％……であった。教育を受ける機会すら奪われた、かわいい少女たちにささえられた一家族の生活とは、一体どのようなものだったろうか。悲惨だったのは、無論、繊維労働者だけではなく。……名古屋市とその近郊に……四七〇人の労働者がマッチを生産していたが、そのうちの一〇歳未満の義務教育年齢の幼年者が八七人を占めたほか、男工の八三・一％は一五歳未満、女工の四二・三％は一三歳未満であった。かれらの賃金は出来高払いであった……

日本資本主義はこのような民衆の悲惨のうえにきずかれていた。政府は低賃金を維持するために低米価を必要とした。凶作による米価の暴騰がなにをもたらすかは、すでに一八九〇年の北陸の米騒動が明確にしめていた。

低米価を維持するために、安価な外産米の輸入は、政府の重要な課題であり¹⁸⁾、朝鮮の支配と占領は、外米の安定的な供給のためにも、また過剰人口を殖民の名で棄民するためにも、政府にとっては不可欠であった。

pp.28～29

18) 今日のT P P 論議の核心のひとつがここにある。